

V 水稲「きぬむすめ」の特性と栽培上のポイント

1 来歴

1991年に九州農業試験場(現在の九州沖縄農業研究センター)において、「キヌヒカリ」を母、「愛知92号(祭り晴)」を父として人工交配により育成された。

2 特性

出穂期は8月中旬、成熟期は9月下旬～10月上旬の早生種である。草型は“中間型”で、耐倒伏性は“中”である。収量性は比較的高い。

玄米は粒形、粒大ともに“中”で、外観品質は良好である。炊飯白米は外観が良く、粘りがあり、食味は良好である。

葉及び穂いもち抵抗性はともに“中”で、白葉枯病抵抗性は“やや弱”である。穂発芽性は“中”である。

3 栽培管理のポイント

(1) 栽培適地

平坦部～中山間部

(2) 土づくり

堆肥等有機物や土づくり資材の施用、深耕、稲わらの腐熟促進対策を励行する。

(3) 育苗

- ・種子更新は毎年行う。
- ・浸種は積算水温で60～80℃を目安とする。
- ・催芽は30～32℃で18時間程度を目安とし、鳩胸^{ハト}状態を確認する。
- ・発芽は比較的早いので催芽中は芽の状態をよく観察するなど注意が必要である。
- ・1箱当たりの播種量は100～120 gとする。
- ・緑化～硬化期は温度管理を適正に行い、徒長に注意する。

(4) 移植

- ・移植適期は5月上旬～下旬とする。このとき、平年の出穂期は8月中旬、成熟期は9月下旬～10月上旬となる。
- ・栽植密度18.5株/m²(株間18cm、条間30cm)、1株植付本数3～4本を基準とする。
- ・極端な浅植や深植は避ける。

(5) 肥培管理

- ・基肥：窒素成分で3～4kg/10a。
 - ・中間追肥：7月第1半旬を目安に茎数が少ない、葉色がうすい場合には窒素成分で1kg/10a程度を施用。
 - ・穂肥：出穂20日前と10日前に、それぞれ窒素成分で1～1.5、2～2.5kg/10aを施用。
- ※倒伏防止のため、多肥栽培は避ける。

第2表 窒素施用量 (Nkg/10a：上段) と施用時期 (出穂前日数：下段) の目安

基肥	中間追肥	穂肥		計
		1回目	2回目	
3～4	(1)	1～1.5	2～2.5	6～9
	分けつ盛期	20日	10日	

() は7月第1半旬を目安に茎数が少ない、葉色がうすい場合に施用する。

(6) 水管理

- ・倒伏防止のため中干しを徹底する。
- ・出穂後30日程度は間断灌水を行う。
- ・その他、基本的な水管理を励行する。

(7) 雑草防除

- ・除草剤は雑草の発生状況を見て、遅れないように散布する。

(8) 病虫害防除

- ・いもち病抵抗性は強くないので、適切な防除を行う。
- ・白葉枯病抵抗性はやや弱いので、常発地での栽培は避ける。
- ・縞葉枯病対策として必ず育苗箱施薬を行い、ヒメトビウンカの発生予察に注意して適切な防除を行う。
- ・その他、苗立枯病、紋枯病、カメムシ等害虫の適切な防除を行う。

(9) 刈取

- ・刈取は青味粉率10～15%のときに行う。
- ・穂発芽防止のため、適期刈取に特に留意する。

(10) 乾燥・調製

- ・乾燥は仕上がり水分15%とする。
- ・ライスグレーダーによる適正な調製を行う。